

## 宮城県のキュウリ生産者をボランティア支援

2011年10月22日、みやぎ生協職員有志ら24人が集まり、「めぐみ野」きゅうり生産者の復旧作業ボランティアを実施しました。

みやぎ生協では、9月21日より、これまでの「みやぎ生協の産直」を全て「めぐみ野」というブランドに変更しました。東日本大震災により、大きな被害を受けた中で、生産者と消費者がお互いを思いやりながら「めぐみ野」と共に、力強く新しい一歩を踏み出しています。このボランティアもそんな思いから始まりました。

今回ボランティアに訪れたのは、「めぐみ野」のきゅうり生産者である、鹿野昭(かの・あきら)さん、百合子(ゆりこ)さんの畑です。

鹿野さんは、約20年前から、みやぎ生協に特別栽培のきゅうりを出荷しているベテランの生産者で、700坪の栽培面積を2人で耕作してきました。

しかし、震災が発生し、海岸線より1キロ弱しか離れていない鹿野さんの家には、津波が押し寄せ、5棟あったハウスや育苗用のビニールハウスは、全て壊滅状態になりました。震災直後は、70台以上もの車がハウスの中に積み重なっていたといいます。また、震災発生2カ月前に、新しい設備を導入したばかりで、その被害を目の当たりにした鹿野さんは、啞然として何も考えられなかったそうです。

震災前、石巻にはみやぎ生協の産直きゅうり生産農家は、6軒ありましたが、現在は3軒が廃業し、残り3軒のうち1軒が復旧、2軒は復旧に向けて準備をしている最中です。鹿野さんは、その復旧を目指している1軒です。

しかし、一言に復旧といっても、課題は山積しています。たとえば、栽培には、水が必要ですが、水道水を使用すると費用が莫大にかかります。そのため井戸水を使用していましたが、今回の津波の被害を受け、その井戸水が塩水化してしまいました。キュウリは、塩害に弱いため、塩水化した水は使用できないという現実があり、すぐに生産再開とはいきません。また、キュウリの栽培には、暖房施設など、さまざまな施設が必要ですが、多額の借金をして栽培再開に踏み切れることは、容易なことではないのです。

そこで鹿野さんは、塩害に強い葉物野菜(小松菜、ユキナなど)から栽培をはじめ、いずれはキュウリの栽培を再開したいと話します。キュウリも、1年中栽培することを考えるのではなく、栽培する際に暖房機がいない時期を選びつつ、少しずつ前に進んでいくことを考えています。ただ、放射性物質の問題も気がかりで、せっかく作った野菜から放射性物質が検出されれば、台無しになってしまうので、様



表面の泥をすくって、もとの畑の土を出している作業の様子。

子を見ながら栽培を行なっていきたくと話されていました。

22日のボランティアに参加したのは、みやぎ生協職員とその家族、そして取引先業者の24人です。

鹿野さんのビニールハウス内でのボランティアは、今回で2回目。1回目のボランティアは、6月に行なわれ、ハウスにたまったがれきの撤去を行ないました。6月のボランティアにも参加した、みやぎ生協職員の平塚是史(ひらつか・よしふみ)さんは、「前回のボランティアでは、大きく、重いものを運ぶのがメインでした。ハウスの中には、いろいろな家庭雑貨が多く流されてきていました。6月の作業は、暑く、体力がいりましたね」と話します。

今回行なわれたボランティアでは、主に泥のかき出し作業を行ないました。津波の影響でたまった泥をスコップで15cmほど取り除き、元の畑の土が見える状態まで戻すという作業です。取り除いた泥は、土のう袋に詰めていきます。

畑の土は、白く乾いた状態になっており、これは、海水をかぶったことで、表面に塩が残っているからだそうです。土を掘り返す作業は、力が必要で、ボランティアは大粒の汗をかきながら作業していました。泥を掘っている

と、中から、以前は誰かが使っていたであろう、歯磨き粉や、カセットテープ、CDなど、さまざまなものが出てきて、津波は多くのものを押し流していったのだと分かります。

ボランティアの平塚さんは、「以前は、農産物の担当をしていたので、鹿野さんのこともよく知っています。少しでもお役に立てれば」と黙々と作業をされていました。他にも、みやぎ生協職員の佐藤とき子(さとう・ときこ)さんは、「実は今回がはじめての参加です。ずっと何かしたいと思っていたので、今回参加できてよかったです」と話していました。



ボランティアによってかき出された泥がつまった土のうは数え切れないほど。

掘り起こした土は、土のう袋に詰めていく。